



Gマークと I T 点呼で コンプライアンスを 攻めの経営に活用する

I T 点呼で運行管理者を
2 倍にも 3 倍にも増強できる

CASE 10

I T 点呼導入による運行体制強化

I T 点呼の導入によって、運行管理者の負担を増やさずに顧客要望である 24 時間出荷体制を構築できた。事例企業では特定顧客のために、1 営業所だけは 24 時間出荷体制を行っているが、他の営業所でも時々発生する早朝・夜間出発に対応するため運行管理者の負担が大きかった。I T 点呼の導入で、点呼を別営業所から実施できるようになり、運行管理者の負担は軽減した。



課題・ニーズ

■ 荷主のニーズに対応するため、夜間早朝の出荷を行わなければならない。

夜間、早朝の点呼は、運行管理者に大きな負担を負わせることになる。運行管理者と補助者が交代で対応しているが、1、2台の出荷でも点呼員を待機させなくてはならず、無駄も多い。別の営業所では、当初から24時間体制なので、I T点呼で対応させたい。

■ I T点呼の導入をきっかけとして、さらに輸送品質の見える化を向上したい。

将来のI T点呼導入を予定して、I T点呼に活用できるアルコールチェッカーを導入してきた。主要荷主は、コンプライアンスに厳しいので、今回のI T点呼導入によって、さらに輸送品質の見える化を図りたい。

会社情報

営業所数：2、車両台数：50（トレーラー、冷凍冷蔵車、大型、中小型等）

食品、液体、冷蔵冷凍食品、他

安心・安全を最重要商品として位置づけている。
Gマーク及びグリーン認証を受けている。



導入効果

■ I T点呼で運行管理者の負担が減った。

事例企業では、2営業所のうち、24時間体制を整えている営業所の運行管理者が、I T点呼を実施することにより、点呼実施営業所の運行管理者の早朝、夜間の負担が軽減された。

■ I T点呼システムにより、点呼実施記録がより明確になった。

アルコールチェッカーによる飲酒検査、高精度の動画により、点呼実施日時や顔色、受け答えの様子、免許証の携帯確認などがすべてデジタル記録されるようになった。点呼実施を確実に証明できるようになり、見える化が図れた。



システム概要

I T 点呼は、I T 点呼ソフトウェアがインストールされたパソコンと点呼機器を使って、インターネットを介して点呼を実施するためのシステムである。具体的なシステム構成を下記に示す。

システム構成

1) ドライバー側の設備

パソコン本体 (I T 点呼ソフトウェア)、アルコールチェッカー、カメラ、マイク



2) 点呼執行者側の設備

パソコン本体 (I T 点呼ソフトウェア)、カメラ、マイク、パトライト (アルコール検査結果のサイン)



ドライバー (左) と点呼執行者 (右) がパソコンを通じて点呼実施する様子





コスト・期間

■ コスト

項目	費用
I. ハードウェア パソコン 2 台 カメラ 2 台、マイク 2 台、スピーカー 2 台 アルコール測定器 1 台、パトライト	60 万円
II. ソフトウェア IT点呼用ソフトウェア システムインストール料、指導料	40 万円
III. その他の費用 ソフトウェア保守料(開発費の 7%)	年額 3 万円
合計(導入一時費用のみ)	100 万円

※IT点呼用機器には、アルコールチェッカーの費用(約 28 万円)が含まれている。

■ 導入期間

導入フェーズ	期間
I. 準備段階 開発会社との打合せ、相談、見積り	1ヶ月
II. 導入段階 ハードウェア、ソフトウェア購入、 マスタ設定と入カトレーニング	3ヶ月
III. 稼働段階 データ入力、出力内容の確認 業務運用のルール決め、全社員教育	1ヶ月
合計	5ヶ月



成功要因

■ 運行管理者の体制と I T 点呼実施の調整を行い、必要最低限の実施にした。

事例企業の I T 点呼は、2ヶ所あるうちの1ヶ所では、24時間出荷体制を持っており、交代制勤務の体制が整っているため、I T 点呼の必要性はなかった。日中出荷が中心の別の営業所では、要請されている早朝・深夜の車両数が少ないため、点呼実施のためだけに出勤して来るような体制だった。他営業所とは仕事内容も異なるため、配送業務の細かな点やドライバーの勤務状況や配車状況もわからず、結果として単に点呼を代行にならざるを得なかった。そのため、週の初めや月末などについては、I T 点呼を行わず、必要最低限の実施にした。このことにより、ドライバーから見た時に、「運行管理者だけは I T 点呼のおかげで楽になったが、ドライバーは何も変わらない。」というネガティブな反応にならないように配慮して I T 点呼を導入することができた。

■ アルコールチェッカー導入で十分な準備をした。

事例企業では、I T 点呼導入の1年前にアルコールチェッカーを導入した。この時には、ドライバーからの抵抗もあったが、社内でのコンプライアンスに関する意識を高めながら時間をかけて導入したので、全員が納得して、積極的に利用している。I T 点呼の場合、点呼業務そのものは以前から実施していたものであるため、違和感なく導入できた。



失敗のリスク

■ アルコールチェッカーを導入せず、一気に I T 点呼を導入する。

アルコールチェッカーの導入と同様に、導入のための社員との対話を通じた合意形成が必要だ。I T 点呼は、アルコールチェッカー使用が前提となっているため、まずはアルコールチェッカーで十分な導入機運を高めてからでないと、思わぬモラルダウンによるトラブルが発生することにもなる。